2022年9月21日
日刊建設通信新聞

総合資格学院・学生実行委「建築学縁祭 Rookie選」

本能的な感性を空間に表現

総合資格（東京都新宿区、岸隆司代表取締役）が運営する総合資格学院と建築学縁祭学生実行委員会は、「建築学縁祭」を開いた。首都圏で建築を学ぶ学生が、学校の枠を超えた「縁」を結び、建築の腕を試す成長の場として企画された。設計課題競技「Rookie選」では、524件の応募作品から選ばれた10作品が公開講評審査会に進んだ。制作した学生は審査員を務める現役の建築家を前に、作品コンセプトなどをプレゼンテーションして質疑に答えるなど貴重な経験を得た。

Rookie選では、1次審査を通過した100作品の模型を、会場となった新宿区の工学院大学新宿アトリウムに展示した。公開講評審査会の対象10作品は、審査員が審査会当日に展示された模型の中から選んだ。

西田司氏（オンデザインパートナーズ）の司会のもと、大野博史氏（オーノJAPAN）、小堀哲夫氏（法政大教授）、冨永美保氏（tomito architecture）、平賀達也氏（ランドスケープ・プラス）、持田正憲武蔵野美術大教授、吉村靖孝早大教授の6人が審査員を務めた。

10人の学生が持ち時間の3分間で作品に込めた思いや狙いをプレゼンテーションした。質疑応答では、審査員から「プレゼンの背景に歴史的な時間軸があるのかを聞きたい」「屋根勾配と屋根の素材はどのように選んだのか」など作品の実現性や検討プロセスに関する鋭い質問が飛び交い、学生は緊張しながらも懸命に答えていた。

審査の結果、最優秀賞には吉村優里さん（武蔵野美術大3年）の「日常のうらがわを」が輝いた。優秀賞には奥田真由さん（法政大3年）の「学び場のらく書き」、藤原彰大さん（慶大2年）の「Worm Chair」が選ばれた。ポラス賞には小川七実さん（法政大3年）の「ハレ、ケ、ケガレ、ハレ」、メルディア賞には法兼知杏さん（同）の「手漉き紙に綴る」、総合資格学院賞には大池智美さん（芝浦工大2年）の「みせるウチ、つなぐソト」を選出した。

最優秀賞に輝いた吉村さんの作品は、暗闇の中で過ごすという体験に着目した。高い柱と急傾斜の屋根で建物内部に屋根裏のような薄暗い空間をつくり、窓から差し込む光が内部に多様な陰影を描く建築物を計画した。

プレゼンに対する質疑の中で平賀氏は「みんなが『参った』と思っているだろう。センスも良く、形態も破綻していない。まちの周辺とのコンテクストが小さな建築の空間に表現されていて、技術的にも収まっている」と高く評価した。

最優秀を受賞した吉村さんのプレゼン

最優秀賞の吉村さんと作品模型

優秀賞の奥田さん

優秀賞の藤原さん

公開講評審査会に参加した学生と審査員の記念撮影

作品を講評した小堀氏は「現状に対する疑問を出発点に、暗さという自分の本能的な感性が空間に形として現れていることが非常に面白い」とした。その上で「建築が面白くなってくると、自分のやりたいことと求められていることの間で葛藤が生じる。この作品はバランスが良いながらも根本には本能的な部分を表現したいという気持ちが表れていて良かった」と語った。

優秀賞の奥田さんの作品は、大学図書館を外堀に再編するという内容だ。土手の上に合わせた水平材が重なり合い、書架や道をつくりながら学生の学びと交流の場としての役割を果たす。

冨永氏は「形の提案を強く打ち出しているが、上書きすることができる。例えばワークショップなどで模型を示して議論を経て修正しながらつくっていくような、対話の余地がたくさんあり、プロセスがとても面白い」と高く評価した。

同じく優秀賞の藤原さんは、板状の状態から尺取り虫のように組み上がるいすを設計した。大野氏は「図面のつくり方などにとても共感でき、構造や座ったときの体感なども意識してつくられている。建築も実際はモノなので、デザインだけでなく構造やランドスケープなども建築家が一定のレベルまで考えてつくる必要がある。そうした物質的な側面を思い出させてくれる良い案だ」と評した。

全体を通して持田教授は「突然ひらめいた案も良いが、無駄なことや余計なことを考えながら回り道してたどり着いた案はより深みのある内容になる。今回の質疑を通して、皆さんが多くのことを考えて取り組んだことがうかがえた」と講評した。

吉村教授は「2―3年生が中心ということで、ある種の型のようなものができておらず、荒々しさもある点に良さを感じた。選ばれた作品を見ると、周辺がどうであれ自立して成立するコンセプチュアルなものが目立った。今後は、敷地などの周辺のコンテクストをつくり込むことにも気を配っていく必要があるだろう」と語った。